

「自己責任論」の終わり

(マルコ一〇・一七〜二七他)

「愛と青春の旅立ち」「プリティウーマン」「シカゴ」そして今は「寅さん」と言えばご存じリチャード・ギア。その役者魂たるや凄いものがある。新作「Time out of mind」でホームレスに扮する彼は役作りのため実際に路上生活をしたという。彼は言う。「人々はただ私の目の前を通り過ぎ、蔑んだ目を向けていた。たった一人の女性が優しい声をかけ、「冷めちゃったけど」と言つてピザを恵んでくれた。一日の稼ぎはたったのドル半だったよ。」と。前から貧困の問題に取り組んできた彼はこれを機にますます熱心にホームレス支援に取り組んでいるという。しかしこうした話が出ると、どこからともなく「怠けものを甘やかせてはいけない」「もつと努力させるべきだ」と言つた「正論」が聞こえてくる。その究極の殺し文句、それが「自己責任論」である。確かに人間は努力によつて多くのことが出来る。しかし人にはどうしても出来ない事もある。以下イエスとある男の対話から、「人には出来ないこと」について考えたい。

一、人は自分を救えない

イエスとその一行が道を歩いていると、

ひとりの男が走り寄つて「永遠のいのちを自分のものにするには、何をしたらよいでしょうか」と尋ねた(一七節)。彼は神のみが所有している永遠のいのち、あるいは救いを自らの行為によつて買い取るうと考へていたようである。そこでイエスは彼に十戒を示したが、彼は「そういうことは幼い時からきちんと守っています」と豪語した。勿論これは彼が一度も嘘をついたことが無いことや両親に全く従順であつたことを意味しない。あくまでも一般的な常識の範囲で「守つていた」に過ぎない。そこでイエスは彼に最大の「取引」を持ちかけた。全財産を貧しいものに施し、それで天国を買い取り、弟子となれと言われたのだ。果たして彼は悲しみながらイエスの元を離れて行つた。続いてイエスは「金持ちが神の国に入るよりは、らくだが針の穴を通るほうがもつと易しい」と弟子たちに語られた。これはユダヤ教でよく用いられていた誇張法であり、不可能を強調する言い方である。したがつて、この「らくだ(カメーロス)」を「綱(カミロス)」と読み変えたり、エルサレムのどこかには「ラクダがぎりぎり通れる針の穴と呼ばれる門があつた」という解釈をとる必要は全くない。イエスの真意は「人には出来ない」ということだけだからだ。人は神と取引をして救われることは絶対に出来ない。それを教えるために愛の人イエスは敢えてこの男の急所を衝いたのである。

二、神のみが人を救うことが出来る

イエスのラジカルなことばを聴いた弟子たちは驚き「それでは誰が救われるのか」と呟いたのだが、それに対するイエスの答えもまた弟子たちの思いを超えていた。というのもイエスは「誰が救われるのか」という議論を「誰が救うのか」に転換したからである。確かに人は自分を救うことは出来ない。だが全能の神には出来るではないか。イエスはそう弟子たちに教えられたのだ。では神はどのようにして私たち人間を救うのだろうか。小聖書とも呼ばれるヨハネ三・一六にその答えがある。「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それはみ子を信じる者がひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである」神はかけがえないご自身の子、イエス・キリストをこの世に与えた。それは即ちイエスを私たちの罪の身代わりとするために十字架の上で殺し、更に私たちのいのちを更新し、永遠のものとするために彼をよみがえらせたということである。見よ、これは徹頭徹尾神の行動であり人に入る余地はない。出

来るとすれば、自らを救うことは出来ないという悟り、神の救いを素直に受け取ることだけである。その時人には出来ないことは誰にでも、どんな悪人にも実現するのだ。神がその愛のゆえに十字架のイエスによつて人を救う。これを福音というのだ。

* * *

一八で極道の世界に入った彼。二八の時には組長代行に「出世」したが、覺せい剤に溺れ、組を逃亡し逮捕。三度目の懲役生活が始まつた。自らの刑期短縮の爲牧師とコンタクトを取つた彼はその牧師の恩に報いるために聖書を読みはじめたのだがその時「わたしは決して悪者の死を喜ばない。かえつて悪者がある態度を悔い改めて生きることが喜ぶ(エゼキエル三三・一一)」のみ言葉に捕えられイエスを信じた。出所後すぐ神学校に入学。同時にカラオケスナックを借りて教会を開拓した。今年十年目を迎えたその教会には多くの人が集い、イエスの希望に生きていくという。友よ、永遠のいのちは天国の店先に並ぶ「商品」ではない。自らの罪と弱さを認めてイエスにすがるときに与えられるプレゼントだ。神が差し出しているプレゼント、十字架のイエスの真実な愛と永遠のいのちを今自分のものにしてはならないか。